インドネシア共和国　　派遣期間　2015 年 4 月～ 2018 年 3 月

バンドン日本人学校の学校経営と現地教育に関する一考察

前　在インドネシア日本国大使館付属バンドン日本人学校　校長
現　北見市立常呂小学校　校長　櫻田　弘道

１．インドネシア、バンドンの概要

1年中変わらず青空が広がるバンドンの町

インドネシアは、1 万３千以上の島々が、東西 5110 ㎞、南北 1900 ㎞の広大な国土に存在する世界最大の群島国家である。また、約３００もの民族が暮らしている多民族国家でもある。人口は 2 億 4000 万人以上で世界第 4 位。また、宗教はイスラム教が 90 %を超え、世界最大のイスラム教人口を誇る国であるが、キリスト教、仏教、ヒンズー教など信教の自由を認め多様性を大切にしている。

バンドンはインドネシア第３の都市。人口約 300 万人。首都ジャカルタから東に約 150 ｋｍに位置する。赤道からわずか南に位置するが標高約 800 ｍ、周囲を山に囲まれた高原地帯にあるため、大変涼しくエアコン不要で過ごしやすい。花と緑に包まれた美しい町であり、大学が多く学生にあふれ、スンダ人(温厚、美形で有名)の町として知られている。1955 年にはアジアアフリカ会議(通称バンドン会議）が行われた。また、現在インドネシアの高速鉄道がジャカルターバンドン間で工事が進んでいる。

２．バンドン日本人学校の現況

（１）学校の概要

児童生徒数は近年２０名くらいで推移している。児童生徒数確保が一番の課題と言えるが、現地校、現地インター校に通っていた子が本校に編入学する例が近年多く見られ、バンドン日本人社会の中で日本人学校への理解が進んできているようである。

校舎はバンドンの高台にある高級住宅街に位置し、オランダ統治時代の邸宅を改良した大変趣のある建物を賃借している。

同じ敷地内に幼稚部があり、園長は学校運営委員長が行っているが非常勤であり、校長が日々指導・助言を行い、小中学部と協力しあいながら進めている。

（２）治安・安全

安全に気を配った生活をしていれば、日常の中で特に危険に感じることはほぼない。明るく親

切なインドネシア人は親日であり助けられることが多い。しかし、テロの脅威、ひったくりなどの軽犯罪の危険性は年々高まっている。実際に昨年も爆弾テロ及び未遂事件がバンドンで起きており、治安悪化が叫ばれる首都ジャカルタから約１５０ｋｍにあるバンドンにもその影響が広がっている。

バンドンは医療面での不安も大きい。ジャカルタでは日系の病院や進んだ医療を受けることができるが、バンドンはすべてローカルの病院であり日本語は全く通じず英語も厳しい。医療水準も日本に比べかなり厳しいものがある。

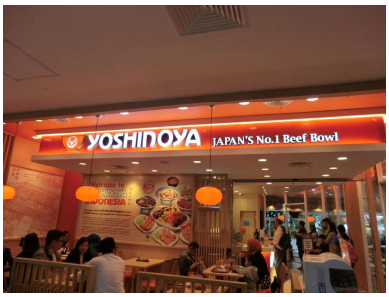
（３）物価等

インドネシアは物価が安いと言われるが、日本人が安全に暮らすにはそうとも言えない。なぜなら、売られているものは２極化しており、日本の約１／１０の所得で暮らす一般的な現地人が使うもの、食べるものなどは確かに安いが安全上心配が大きく買うことはほとんどない。われわれ日本人が安全に暮らす上で購入しているものはインドネシアでは富裕層向きのもので、とても高く日本の１．５～２倍以上するものがほとんどである。

インドネシアの物価上昇、最低賃金の上昇は大きい。今年の最低賃金は８．７１％上がった。毎年同程度上昇しており、３年で約２５％以上上昇したことになる。安全に暮らすために、運転手やガードマン、メイドを雇用しているが在勤手当は減少傾向にあり派遣教員の生活への影響は大きい。

インドネシア（バンドン）は日本とのつながりは深く、食事を含め日本とあまり変わらない生活ができる。例えば、日本でよく目にするファストフード店や衣料品店、日本食のお店や専門スーパーなど年々増えている。日本語を学ぶ学生も大変多く、親日家が多いこともあり大変暮らしやすい。しかし、大多数の人がイスラム教のため、豚肉、お酒は手に入りにくい現状にある。

（バンドンにある日本でお馴染みのお店）



（４）派遣教員と教科指導

教科担任制で指導しているため、すべての教員が小学生、中学生両方を教えることになる。最近の児童生徒の傾向として、日本の教育を受けてきておらず、インター校などからある程度学年が進んだ後で編入学してくる子が多く、少人数なのである程度は個に応じた対応をしてきたが、今後はより有効な形を作っていく必要がある。教員の平均持ち時数は週約２５時間。６年生が欠

学年でこの時数なので６年生に編入学があった場合はさらに厳しい状況になる。しかしこれは、英会話を外出しで行うなど、少しでも子どもたちに力をつけようという先生方の熱い思いから生まれている状況で、誰も不満を言うことなく子どもの学力向上に向け指導に励んでいる。文科派遣は校長含め７名、学校採用教員１名。

（５）学校運営委員会及び在外公館関係

学校運営委員会は日本人会で選任される運営委員長と委員長が委嘱する役員、校長、教頭、ＰＴＡ会長で組織している。一番の問題はなり手がいないことである。本校は多くの日系企業の財政面での支援により成り立っているので、運営委員は学校のことをよく理解し積極的に取り組んでくださる方が必要である。現在は少ないながらも、学校への関心・理解が高い方になっていただき、非常に良好な関係の中で学校運営を行えている。

在外公館は、バンドンにはなく約１５０ｋｍ離れたジャカルタ大使館の管轄となる。離れてはいるが、とても丁寧に対応していただき日常で困ることはない。しかし、テロなど事件があった時の対応、情報収集は電話でのやり取りが中心となり心配はある。また、ジャカルタ―バンドン間は日常的にひどい渋滞で、深夜などであれば３時間弱で移動できるが、日中は５ ～ ６時間はかかり距離以上に遠い存在である。

３．バンドン日本人学校の教育～現地社会に開かれた教育課程

（１）教育課程は基本的に日本と同じく学習指導要領に沿って編成・実施されている。特色ある教育としては、インドネシア語・文化について週１時間、英会話を週２時間行っている。

（２）授業日数は２００日を下回らないよう年間計画を組んでいる。多くの日本人学校も同じと思うが春休みは教員の帰任・着任があるため約１カ月必要となる。また、イスラムの国であるためレバラン休暇を約１０日取らなければいけないため、授業時数の確保は大きな問題である。そのため、７時間授業の日を週に３日設けている。

（３）四季のないインドネシアで暮らす子どもたちに日本人としてのアイデンティティを育てるため、日本の伝統的な文化体験、季節の行事を大切に行っている。５月「こいのぼり集会」、７月「七夕集会」、９月「夏祭り」、１月「書初め会」「餅つき会」、２月「豆まき集会」などである。そういう意識で子どもを育てるため、バンドン日本人学校の子は今の日本の子に比べ、日本の文化を大切にしたり理解したり、また、正しい日本語を使える子どもが育っていると感じる。

（４）現地理解教育について

①現地校との交流を児童生徒及び職員間で行っている。児童生徒間交流については隔年で訪問しあい、授業交流、文化体験など行っている。インドネシアは親日の国であり、大変良好な関係で行えている。

②社会見学など地域の諸施設へ出かけての学習は、地域の公共施設、自然観察、日系企業訪問な

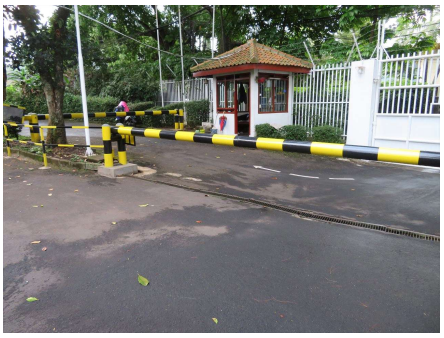
どを幅広く行っている。安全対策は慎重に行わなければいけないので、最新の現地の情報収集、日頃からの人間関係づくり、警察等への警備依頼などを行っている。

③バンドンから離れてのインドネシア理解教育として、修学旅行ではバリ島やボロブドゥール遺跡のあるジョグジャカルタに行っている。また、宿泊学習や交流学習ではスラバヤ日本人学校、ジャカルタの日本人学校に出向き、同じインドネシアで暮らす子ども同士の交流、また、その土地の文化体験を行い、同じインドネシアでも場所により、様々な違いがあることを学んでいる。

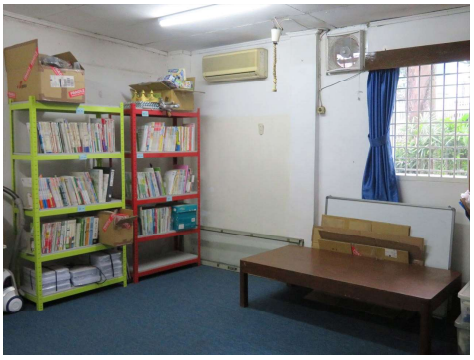
バリ島への修学旅行

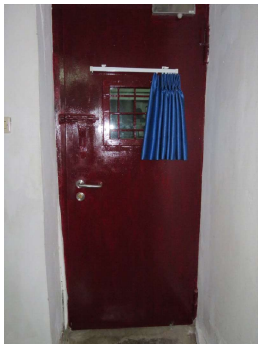
（５）安全対策

海外であるため、治安・安全への対応は非常に重要である。日本同様、火災や地震時への避難訓練のほか、暴動やテロを想定した避難訓練、引き渡し訓練を行っている。H29 年度には、安全対策強化として日本国から 98 %の補助をいただき、パニックルームの設置など日本円で 1000 万円をこえる工事を行った。警備員を 24 時間 365 日体制で配置し警備強化を図ってきた。


24時間体制の警備小屋と正門の遮断バー

学校中を監視する防犯カメラ





万一のテロ・暴動時にも安全に非難できるパニックルーム（ガラスは防弾ガラス、戸は5.5cmの鉄製）

４．バンドン日本人学校の校長の職務

日本人学校の校長の職務は、国内同様とそうでない部分がある。同様の部分は教育課程の管理や職員の管理などだが、教育委員会がないので校長の判断で進めていくことが多くなる。国内との違いは、例えば海外ゆえの安全管理や現地とのかかわり、また学校運営委員会や大使館とのかかわりも海外独特といえ、特にバンドン日本人学校は小規模校のため教頭の派遣がなく、また、日本人の事務もいないため校長の仕事の幅は多岐に渡った。

職員の管理についても、全国各地から集まる先生たちは都道府県によって当たり前は違い、また、自分の考えをしっかりもっている教員が多いので日本以上に校長のリーダーシップが問われ

る。保護者も同様で北海道ではこうだから・・では通用しない。この地で必要なことは何なのか？すべきことは何なのか？本質をとらえ、結果を出していくことが職員にも、また、保護者、日本人会に対しても必要になる。

また、同じ日本人学校といっても派遣国や地域、学校規模によって校長の職務は大きく異なる。例えば、インドネシアには首都のジャカルタ、第２の都市スラバヤ、そしてバンドンの３都市にあるが、児童生徒数はジャカルタで約１２００名、スラバヤで約６０名、バンドンで約２０名と大きく異なる。ジャカルタのような大規模校では教頭が複数おり、教員で約７０名、職員全体では１００名を超えるスタッフの管理や、保護者からの要望、相談、苦情なども相当数あるようで苦労も多いと聞く。では、小規模校の校長はどうか？大変である。人がいないのでやることが多く、多岐にわたる。文科省・大使館等、外部とのやりとりは、基本すべて校長が行う。そのことは単純に事務量が多いということではなく、点検・確認をする人がいなく、そのプレッシャーはなかなかなものである。また、海外ゆえの仕事も多くあり、例えば現地採用教員を１名雇用した時は、海外での雇用条件を作成し運営委員会の承認を受け、他の在外教育施設等への募集、ネットや電話を使った採用面接、公用旅券の手配、ビザの申請など慣れない仕事をあちこちに問い合わせしながら行った。また、本校には幼稚部があり、園長は運営委員長がやってくださっているが、日常の管理・指導は校長が行う。現地スタッフの管理も、学校会計も校長の仕事である。特に現地スタッフの管理はインドネシアの常識と日本の常識が違うので、敷地はインドネシアであるけれど学校内は日本の常識で動くことを説明し指導した。しかし些細なことも含めると日々トラブルはあり、その対応・指導は基本的に校長の仕事となる。特に私が派遣された年度から現地での校長引き継ぎがなくなったので赴任直後は不明な部分が多々あり、それでもわからない、知らなかったでは済まされないので苦労した。また、授業もあり、だいたい週５～１０時間を教えていた。しかし、様々なことにかかわることは学校の状況をよく知り、適切な判断には欠かせないものであり大切なことであったと感じている。

もう１点、校長で派遣されると年に１度、世界を５つに分けた地域の校長会議に出席することになる。バンドンは東アジア大洋州という地域になり４１校という最大の校長会である。私がいた３年間では、中国の蘇州、杭州、タイのバンコクで行われた。（今年はオーストラリアのパースである。）一般の教員だと自校から離れることはほとんどなく、他の日本人学校のことはわからないが、校長は東アジア大洋州での校長会議のほか、インドネシア３校の校長会議、そこで知り合った校長との学校訪問などと幅広く日本人学校や地域を見ることができた。やはり、学校や地域によって学校の課題は違い、安全対策、大気汚染、校舎借料の問題、教育要求の高さや児童数の減少・増加などさまざまであった。インドネシアは爆弾テロ対策など安全強化が喫緊の課題となり、特に３年目は重点的に取り組んできた。

(本校の教員にはできるだけ他の日本人学校のことも学んでほしいと考え、インドネシア３校の校長で話し合い、一般教諭の交流研修を行った。数日間の他校での研修だったが、その後、インターネットを使った合同授業や宿泊学習への発展、日常の情報交換などつながりが生まれ、成果をあげている。)

５．バンドン日本人学校における今後の教育指導のあり方

・小規模校の利点を生かし、多様化する子への対応を強化する。
（日本語を身につけていないで入学する子への対応など）
・小学校英語、道徳の教科化など、日本の動向を注視し、柔軟で創造的な教育課程を編成する。

・バンドンは治安や交通事情から、現地の子どもたちとの交流を学校外で行うことは難しい。しかし、学校の中だけで生活していては海外で暮らす意味は薄く国際性は身につきにくい。そこで本校では、放課後の活動として空手を行い、インドネシア人の指導者や子どもを学校に招き一緒に活動する取組を始めた。素晴らしいインドネシアの指導者に教わることは、信頼できるインドネシア人を知ることになり、また、空手という日本の文化をインドネシアの子と共に関わることで、日本人としてのアイデンティティを育てながら、国際性を養えるものと考えた。

６．インドネシア教育の現状と課題

（１）インドネシア教育の概要

現地校の授業の様子

教育体系は、国家教育省が管理する一般の学校～スコラと、宗教省が管轄するイスラーム系の学校～マドラサ、プサントレンがある。いずれも小学校・中学校・高校・（大学）の 6・3・3・4 制であり、このうち小中学校の 9 年間については日本同様義務教育である。スコラでもマドラサ・プサントレンでも、一般科目と宗教科目を履修することとなっているが、マドラサ・プサントレンは特に宗教を重視した教育を行い、小・中学校から全寮制のところも多い。就学率は小学校、約 93 %に対し、中学校は特に地方ではまだまだ低い現状である。

また、大都会であるジャカルタ特別州は義務教育を高校を含めた 12 年に延長し、公立高校の授業料の無料化を目指しているが、現在まではまだ達成できていない。

公立学校は、小学校がＳＤ(Sekolah Dasar)、中学校がＳＭＰ(Sekolah Menengah Pertama)、高等学校がＳＭＡ(Sekolah Menengah Atas)と呼ばれ、小学校では一般的な教科を学習するが、中学校ではそれに加え、技術や工業、農業などの実技の習得が多くなる。学習言語はインドネシア語だが、第 2 言語として 34 州の各地の言語と英語も学ぶことが多い。近年、高校での第 2 言語で日本語を学ぶ生徒が増えてきている。（個人が、例えば英語と日本語などから選択する）

インドネシアには、「パンチャ・シラ」という国の五原則がある。これは、国家と国民の基本理念で、①神への信仰　②民族主義　③民主主義　④人道主義　⑤社会正義　を小学校から大学まで一貫して教育が行われる。全ての国民はこの国是に従って、宗教、道徳、礼節等の情操教育を学び実践することが求められている。また、インドネシアには「多様性の中の統一」という国家標語がある。インドネシアは多民族、多言語のためにコミュニケーションが非常に難しく、そのため、共通語としてインドネシア語を大切にし、また、少数派の宗教も認めるなど、多様性を重視している。

小中学校は２部制が多く、午前に学ぶ子と午後に学ぶ子に分かれる。小学校・中学校の卒業時に全国統一内容の国家試験があり、１０段階評価がされ基準に満たなければ卒業できない。また、この結果により進学できる学校が決められる。

（２）現地校との交流学習及び視察から

学校名　ステアブディ校（ＳＤＮ　ＳＥＴＩＡＢＵＤＨＩ）

※ＳＤは小学校、Ｎは国立の意味。

①　ステアブディ校の特徴

○２０年以上にわたり本校と交流活動（児童生徒の交流及び職員研修）を行ってきた。

現地校視察をする教員

○政府が管理し、新しい教育を試験的に実践している。日本における付属校のような学校。
　以前は政府本部が管理していたが、今は地域（西ジャワ州）の政府が管理している。
○現在は、教科書を使わずテーマをもとに議論探求していく授業に取り組んでいる。
○学校の教育内容について保護者と話し合いを持っている。これは西ジャワ州では初。
○児童数　約６００名（インドネシアとしては中規模）
○教員数　３０名以上
　・校長１名、副校長３名、以下主任、担任としっかりとした組織。教員は公務員となり、大変狭き門といわれる。
○入学の要件　年齢と住んでいる地域によって入学。登下校は基本的に親の送迎。
○制服は曜日によって色や仕様が異なる。（月は白、火は赤と白、水はスンダの伝統的な服）
○入学料、授業料ともに無料。（良い教育が行われ大変人気のある学校）
○卒業後は、多くが国立の中学校へ進学。
②　５つの教育方針
ⅰ国民性の尊重→月曜日に儀式が行われている。
ⅱ学力向上→先進的な教育の実践から子どもを育てる。
ⅲ宗教の尊重→イスラム教の教えを大切にし、金曜日に全員でお祈りをしている。
ⅳ地域性の尊重→水曜日にスンダの服を着てスンダ語で過ごす。（バンドンはスンダ族の地域）
Ⅴ環境教育の実践→週３回、ごみを拾う活動を行っている。インドネシアではめずらしい実践。
③　視察及び研修を通して
　ステアブディ校とは３年間継続して交流してきたが、学校が積極的に新しいことを取り入れ、行くたびに変化しているように感じられる。
○授業の質の改善
　課題解決型の学習、具体物を使ってのわかりやすい指導、練習問題による定着度の確認など大変勉強になる授業であった。また、教室掲示物も年々工夫されているように感じた。
○靴を脱いで教室に入る取組
　担任の考えで行っている実践だが、ねらいを聞くと、ア.整理整頓の意識を高めるため。イ.教室をきれいに使うため。ウ.気持ちを切り替えて学習するため、などと説明を受けた。
　インドネシアでは、脱いだ靴をそろえる習慣がなく、これほど靴をそろえて脱がれているのを見たことがない。

そろえられた靴

○日本及び他国の教育への関心
　指導にあたっていた教員（教頭）は日本の教育に高い関心があり、自分の学級経営に生かしたいと取り組んでいた。挨拶指導や授業の進め方、学級掲示など、その意図ははっきりと見て取れた。記念品に日本の算数セットをプレゼントしたが、日本らしい工夫された教材に大変感心し喜んでもらえた。
④　今後に期待したい事項
○教育課程の整備
　形式的にはカリキュラムがあり、教科書もある。しかし、実際にはそのことが十分に機能しているようには見えなかった。インドネシア全体に言えることだが、上の者が決定し下に降りてくる際、その意図やねらいが十分に説明されず、また現場に即さない計画であるなど、混乱が見られる。先進国に追いつけ追い越せの気持ちで取り組んでいるのは感じられるが、より実態に即した教育を進めていくことが今後必要なのではないかと考える。

○学習習慣の定着

授業からは、その国の様々な姿が見えてくる。例えば、子どもたちの人の話を聞く姿勢や、教師がすべての子に理解させようという気持ちなどは日本とは異なる。人口の多いインドネシアなので一人一人にまで十分に目が行き届かない状況もあるのかもしれないが、かなりの子が学習内容を十分に理解しないまま先に進んでしまっているように感じた。その中から伸びてきた子がチャンスをつかんでいくという厳しさが、格差をより大きくしているとも思われるし、半面、そこを勝ち抜いた少数がリーダーとなり、インドネシアの今後を切り開いていくのかとも思った。それを意図的に行っているのか、仕方がなく行われているのかはわからないが、やはりすべての子の学力を上げることが今後必要なのではと感じた。（それでも、この学校に通う子たちは恵まれており、街のあちこちには満足な教育を受けられず路上で小銭を稼ぐ生活を送っている子も多くみられるのがインドネシアの現状である。）

７．おわりに

インドネシアの魅力は、様々な困難があるにも関わらず、人々が明るく、前向きに暮らす姿にある。暮らし始めた頃は、日本との違いを遅れた文化と見てしまいがちだったが、それは短絡的で間違った考えであった。例えば、「幸せか？」という調査をすれば、インドネシアは日本以上に幸せに感じている人が多いのではないか。もちろんお金は大切である。しかし、インドネシアの人たちは、それ以上に大切なものがたくさんあることを知っている。おそらく宗教や歴史・文化に起因するものと思われるが、そういう価値観が人々の根底にしっかりと根付いている。

３年間、この国で暮らしインドネシアの価値観や人間性に触れる中で、日本ではわからなかった大切なことに気付くことができた。このインドネシアでの経験を、今後の教育活動に生かし日本の子どもたちの未来に役立てていくとともに、この国が今後ますます発展し、両国がより強い絆で結ばれていくことを強く願っている。